

超短編

2



story by aono



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

久しぶりに母校を訪れた。

紫の花をつけたライラックは満開で、その香りは私が立つ門の所までほのかに漂ってきた。

花の香りは、私から離れていったあの人を思い出させ、胸が少し疼く。

白いライラックもあったはず、と校庭を見回す。

確かあの柵のあたりだと思うけど。

視線の先にあったのは、金属の塀とブルドーザー。

私は10年の時の流れを感じた。

掘りおこされたライラックの木と共に、私の初恋への思いも胸の疼きも跡形なく消えていった。

白いライラックの花の下で語り合ったあの話も、紫のライラックの下で黙って見つめあったあの時間も、全てはもう過去のこと。

私はもう新しい人生を踏み出したのだから。

隣には少し訝しげに私を見つめる彼がいる。

微笑みを浮かべ、私は言う。

「ここが私の過ごした高校なの」

そして彼の腕を取り、職員室へと向かう。

かつての担任へ結婚式の招待状を手渡すために。



photo by binko <http://binko.cool.ne.jp/>

「ねえ ねえ 今日はずいぶん人間がいると思わない？」
「知らないのかい？ 今日はお彼岸と言って 人間達が墓に集まる日らしいよ」
「ふ〜ん いつも静かなこの場所も 賑やかなときもあるのね」
「あの人間達を見てごらん 不機嫌そうな顔しちゃってさ」
「仲が悪そうだわね あの人間」
「おとっとと 桶と一緒に僕がつかまれた 出番だな」
「いってらっしゃい あら 私もつかまれたわ」
「どうやら同じ墓へ行くらしいね」
「ええ でもお互いに何も話さないのはどうして？」
「さあ なんでだろう……」
「こっちの人 口の中で文句を言っているように聞こえるんだけど……」
「こっちもなんだか小声でぶつぶつ言ってるよ……」
「お墓の主はおばあさんらしいわ」
「兄弟で墓参りに来たようだよ。悪口言ってる…… 仲が悪いのね」
「イサンがどうだとか話してるよ」
「イサン？ なにそれ？」
「良く分からんが ここに来る人間の多くが使う言葉だな」
「へえ よほど大事なもののなのね」
「おやおや 喧嘩を始めたよ」
「お墓の前なのに…… 二人に水をかけてやりましょうよ 少し頭を冷やすといいわ」
「OK せーの！」
「あらら 二人とも怒り出しちゃったわ」
「う〜ん 逆効果だったかなあ」



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

私にも煌いていた時期があった。
早春の煌きにも似た二十歳の頃。
太陽の光を受け、背筋を伸ばし、両手を広げ輝く。
私は美しく、生きることが楽しく、男達は私の周りに侍る。
そんな生活は長くは続かなかった。
私は挫折を繰り返し、光を失い、美貌も失った。
煌きは、仄暗く今にも消えそうな蠟燭の光に取って代わり、
闇を背を丸めて歩く。
そんな時、光を受けて輝くススキに出会った。
煌いている。
白髪のような穂をつけても、光を浴びて煌いている。
背を伸ばし、太陽に顔を向ければ、
私だって、又煌くことが出来るはず。
まだまだ若いのだもの、やり直すことが出来るはず。
私は太陽に向かって腕を伸ばし、光を受けた。
明日へのエネルギーを得るために。



photo by mimusan <http://mimusan.my-photo.jp/>

母が好きだったハスを見に、公園へ出かけた。

多々あるハスの中に、何故か私を惹き付けた蕾があった。

足を止め、何気なく蕾を見た。

蕾は仄かに輝き始め、私は固唾を吞んで蕾を見つめる。

光に守られて、ハスはゆっくりと開き始めた。

誰かがそっと手を添えているかのように、はなびらが一枚一枚降りてくる。

全てが開いたその中に、黄色い衣の小さな少女がいた。

私は問う、「あなたは妖精？」

少女はかすかに首を振る。

彼女の背中に羽根はない。

「あなたは誰？」 私は再び問いかける。

少女は微笑を返し、「私はあなた」と答えた。

最初に開いた花びらが、葉の上に静かに落ちた。

露に濡れたはなびらに、少女は身軽に飛び移る。

葉は少し傾いて、花びらの舟を水面に降ろす。

少女の乗ったピンクの舟は、滑るように流れていく。

見送る私の視線の先で、舟は大きな葉の陰に隠れた。

「私はあなた」 あの言葉の意味はなんだったのかと、私は自分に問い返す。

既に視界にはない舟を見つめて、私は思った。「あれは私、これから母のもとへ行くのだろう」

それは母の命日に見た白昼夢。



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

このキノコには小さな小さな妖精が住んでいるのです。
あまりにも小さいので、見逃してしまうかもしれません。
でもよく見てください、傘といしずきの間には小さなドアがあるんです。
そこから妖精たちは出入りをしています。
妖精たちの役割は、森を守ること。
あんな小さな妖精がどうやって森を守るのか？
それは、かなりの間謎でした。
ある日、私は知ってしまったのです。
妖精たちは、蛇や、毒虫や、蜂に変身して、侵入者を撃退します。
森にとっての最大の脅威は人間。
彼らから如何に身を守るかが、森に住むものの最大の課題なのです。
でも、時に美しい妖精のまま人間の前に出ることがあります。
そんな時は気をつけてください。
何故かって？
それは、妖精があなたを救いがたい侵略者とみなし、森の奥深くまで誘導して、幽閉してしまうからです。
妖精の魅力に、人は勝てません。
誰もが夢遊病者のように妖精につきまします。
そして虜になり、そこから出ることはできません。
私がどうしてそんなことまで分かったのか知りたいですか？
それは、私が今、その虜として幽閉されているからなのです。



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

見上げれば、木々は黄色に色づきはじめた。

夏から今まで何と短かったことだろう。

丈夫な体だけがとりえだった中年の女にとって、独り身の女にとって、体調を崩す事は致命的だった。

来年も、このもみじを見る事ができるのだろうか。

ふと弱気になる。

老木の向こうには、すでに赤い衣装をまとったもみじの姿が見える。

最後のおしゃれをして、精一杯美しく見せているもみじの姿が見える。

今年は、いつもにも増して蒸し暑く長く続いた夏だった。

もみじも今を待っていたのだろうか。

遠くから眺めれば、燃えるような情熱をその赤い色に込めて、もみじは自己を主張しているようだ。

もしも最後の秋になるならばと、女は自分を悲劇のヒロインにしたて考えた。

私も燃え尽きるまで 生きてみよう。

もみじの赤い色が、女の脳裏に焼き付いた。

林の中へ入って空を見る。

混み合った枝の隙間から 差し込む光を感じる。

逆光を浴びたもみじの葉は 葉脈を浮き上がらせ 命の儚さを伝えてくる。

もみじの葉は、肩に触れただけでひらひらと地面に落ちた。

もう秋も深い。

人生も終焉なのかと、女は落ちた葉を拾って手帳に挟んだ。

一年が経った。

紅葉の季節がまたやってきた。

女は元気一杯で、人生を謳歌していた。

去年の事など、もう忘れている。

悲劇のヒロインを演じた事など、記憶にもない。

もみじは明るく輝き、空に向かって枝を伸ばしていた。

来年に向かって準備をしているかのように。

遠くから眺めるもみじの林は 黄金色と燃える紅に輝き女の人生を照らしているようだ。

傍らを歩いていた男がカメラを取り出した。

女は紅葉を背にポーズをとる。顔には満面の笑みをたたえて。



photo by binko <http://binko.cool.ne.jp/>

冬の浜辺を感傷に浸って歩いた。

しかし体は正直者。

すっかり冷えて、感傷より暖かさを求めている。

近くにある海辺の喫茶店へ入った。

壁にかかるサーフボードが私の胸に刺さる。

そう、あの人もサーファーだった。

やはり青い色のボードに乗っていた。

私の冷たくなった心と体を温めるかのように。

ストーブ上のやかんが湯気を立てている。

座ってじっとやかんを見つめると、湯気の向こうにあの人の顔が見える。

思い出の顔.....あら？

思い出も年をとるのかしら.....

注文もしていないのに、テーブルに置かれたのは、私の好きなカップチーノ。

思わず運んできた人を見上げる。

そこには優しく微笑むあの人の少し老いた顔があった。



photo by mimusan <http://mimusan.my-photo.jp/>

夏休みは少女にとって解放の季節だ。

肌を焼くような日光を体感じて、少女は幸せだった。

頭を高く揚げて、陽を浴びる。

ひまわりのように少女は成長していく。

夏にはそんな魔法があるらしい。

長い茎と輝くような花は少女そのものだ。

ひまわりの間を跳ぶように歩く少女は自由を謳歌している。

教室で少女は異端者だ。

整列が嫌いだった。

制服が嫌いだった。

給食が嫌いだった。

そして、何よりも全員が同じ方を向いているのが嫌いだ。

何故？ 何故一緒なの？ と問う声が少女を振り向かせる。

見回せば、同じ服に同じ持ち物。

少女は悪寒を感じた。

顔さえも同じに見える。

制服を脱ぎ、自由になる夏が少女の季節だ。

ひまわりのように、思いっきり顔を太陽に向け、背筋を伸ばせる夏こそが。

「何をしているの？」

少女はバツタに聞いた。

「君は何をしているの？」

バツタが少女に聞きかえした。

「自由を楽しんでいるの」少女は答えた。

「同じだよ、僕も自由を楽しんでいるのさ」

少女は微笑んだ。

「じゃあ、私達は仲間なのね」

「君も自由、僕も自由。仲間なんかじゃないさ」

バツタはそう言い残すと、他のひまわりへと飛んでいった。

しばらく少女は考えていた。

頭の上を蜂が飛んでいる。

「何か探しているの？」と少女は問う。

「蜜のある所を探しているんだよ」蜂は答える。

「そこに美味しそうな蜜がありそうだ。邪魔だからどいておくれ」

少女は慌てて、ひまわりのそばから離れた。

蜂はひまわりの花にもぐりこんだ。

「美味しい蜜はたくさんあった？」

少し離れて、少女は聞いた。

「たくさんあるよ、花粉もね」

働きながら蜂は答えた。

「悪いけど、君と遊んでいる時間はないよ。巣の中で仲間がたくさん待っている」

足にいっぱい花粉をつけて、蜂は巣をめざして飛んでいった。

顔を太陽に向けたひまわりの花のとなりに、少女はうつむきかげんの花を見つけた。

不思議に思ってそばによると、はなびらはもう枯れはじめていた。

中にはぎっしりと種ができているらしい。

少女はそっと触れてみた。

固い種ができていた。

種の重みでひまわりは、だんだん頭がたれてくる。

少女はひまわりから離れると、また跳ぶように歩いていった。